

大蓮寺遺跡（第3次）発掘調査報告
～ 松阪市櫛田町所在 ～

2024（令和6）年3月

三重県埋蔵文化財センター

例 言

- 1 本書は三重県松阪市柳田町に所在する大蓮寺（だいれんじ）遺跡（第3次）の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡の発掘調査は、道路改築事業（一）松阪環状線に伴い、実施した。
- 3 発掘調査の費用は三重県県土整備部が全額負担した。
- 4 調査の体制等は次の通りである。

調査主体 三重県教育委員会

調査担当 三重県埋蔵文化財センター 調査研究1課

課長 小濱学 主幹 萩原義彦 技師 土橋明梨紗

調査期間 令和3年10月13日～令和4年1月31日

調査面積 838㎡

なお、調査における詳細については、「I 前言」に記載したとおりである。

- 5 本報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査研究1課が行い、本書の執筆・編集は萩原義彦が行い、目次及び文末に記載した。遺物写真撮影及び編集は、萩原が行った。
- 6 発掘調査にあたっては、地元の方々をはじめ、松阪市教育委員会、松阪市柳田町自治会、三重県県土整備部松阪建設事務所からご教示・ご協力を頂いた。
- 7 本書が扱う発掘調査の記録および出土遺物等は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。

凡 例

- 1 本書で使用した地図は、国土地理院発行「松阪」〔松阪港〕（1/25,000）及び三重県共有デジタル地図（令和2年測図）である。なお、三重県共有デジタル地図は、三重県市町総合事務組合管理者の承認を得て使用している。（承認番号：令和5年4月6日付 三総合地第1号）
- 2 当地は平面座標系第VI系に属しており、本書での図の方位は座標北を使用している。
なお、座標値は世界測地系2000に基づいて表示している。
- 3 土層及び遺物の色調は、日本色研事業株式会社発行の『新版標準土色帖（35版）』（1967年初版）による。
- 4 本書では、以下のように遺構の略記号表記をしている。
SA：槽 SB：掘立柱建物 SD：溝・耕作溝 SK：土坑 P：柱穴
- 5 三重県埋蔵文化財センターでは、以下のように遺物の表記漢字について統一している。
碗・碗・碗 → 碗 坏 → 杯
- 6 遺物観察表は、各遺物実測図の番号に対応する。これは、器種・材質如何を問わず通し番号である。
- 7 実測番号は、実測を行った際の番号である。出だしの3桁は用紙番号で、後ろ側の2桁は用紙内での実測した順序の番号である。
- 8 計測値について記載した口径・器高・その他は、それぞれ最大値ないし接地面をとっている。また、「―」は、計測不能を示している。遺物観察表内で遺物によっては、長さ・厚さ・高台径・底径を表す場合がある。
- 9 調整・技法については、遺物製作時になされていることを記載し、順序を示すものでない。
- 10 素地及び胎土については、粗密を表記する。括弧内には小石・砂粒の有無や大小について記述する。
- 11 残存度合については、その部位の12分割した際の残存度を示した。
- 12 備考は、その遺構・遺物の特記事項について記載している。
- 13 出土遺物実測図の報告番号と遺物写真番号は対応している。
- 14 遺物の写真図版の個々の縮尺は、不同である。

目次

I 前言	(萩原)	1
1 調査に至る経緯		1
2 調査の経過		1
3 記録作業		2
4 文化財保護法等にかかる諸通知		2
II 位置と環境	(萩原)	2
1 地理的環境		2
2 歴史的環境		2
III 調査成果	(萩原)	6
1 基本層序		6
2 遺構		6
3 遺物		6
IV 自然科学分析	(パレオ・ラボ)	12
1 出土炭化材の放射性炭素年代測定		12
2 出土炭化材の樹種同定		14
V まとめ	(萩原)	16
1 遺構について		16
2 遺物について		16

挿図目次

第1図 遺跡位置図	3	第6図 SB16・SA17実測図	9
第2図 調査区地形図	4	第7図 SA18実測図	9
第3図 調査区位置図	5	第8図 出土遺物実測図	11
第4図 遺構平面図	7	第9図 暦年校正結果	13
第5図 調査区土層断面図	8	第10図 遺構変遷図	17

表目次

第1表 遺構一覧表	10	第5表 放射性炭素年代測定および 暦年校正の結果	13
第2表 掘立柱建物・柵一覧表	10	第6表 出土炭化材の樹種同定結果	14
第3表 遺物観察表	11		
第4表 測定試料および処理	13		

写真目次

写真1 出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真	15
----------------------	----

写真図版

写真図版1	19	調査前風景(南東から)	調査区全景(南から)
写真図版2	20	調査区全景(北から)	掘立柱建物SB16(南から)
写真図版3	21	柵SA18(南から)	土坑SK1(西から)
写真図版4	22	下層確認調査坑(南から)	下層確認調査坑(西から)
写真図版5	23	遺物写真1	
写真図版6	24	遺物写真2	
写真図版7	25	遺物写真3	

I 前 言

1 調査に至る経緯

三重県埋蔵文化財センターは、毎年国及び県に問わる各種公共事業について、事業予定地内の埋蔵文化財の確認を行い、その保護に努めている。こうした中で、三重県県土整備部道路建設課から一般地方道松阪環状線の事業計画の照会を受け、予定地内に大蓮寺遺跡が所在することが判明した。その計画は、松阪市内の国道23号線と県道鳥羽松阪を繋ぐものである。その結果、平成24年度において第2次調査を、令和3年度に第3次調査を実施することとなった。

2 調査の経過

(1) 査調経過の概要

大蓮寺遺跡は、遺跡全体の面積は約17,000㎡である。計画路線内は荒蕪地で、本調査の必要の有無確認のための範囲確認調査は平成8年度に実施した。本調査にあたっては、平成24年度に1,161㎡を実施し、令和3年度に838㎡を実施することとなった。以下に、その概要を記述する。

令和3年度

(2) 調査の体制

第3次調査

担当：土橋明梨紗・萩原義彦・小濱学

(調査研究1課)

受託業者：丸文工業株式会社(土工委託)

期間：令和3年10月13日～令和4年1月31日

面積：838㎡

(調査日誌抄)

令和3年

11月8日(月) 表土掘削開始

11月15～19日(月～金) 表土掘削、金曜日には終了

11月24日(水) ベルコン設置、北壁精査、西側において排水溝掘削

11月25日(木) 遺構検出

11月26日(金) 引き続き遺構検出、現代耕作溝多数

11月29日(月) 引き続き遺構検出

11月30日(火) 調査区西壁分層作業

12月1日(水) 降雨後の排水作業

12月2日(木) 遺構検出

12月3日(金) 柱穴ほかを確認

12月10日(金) 遺構掘削

12月13～16日(月～木) 引き続き遺構掘削

12月17日(金) 現地説明会準備

12月19日(日) 現地説明会(参加者52名)

12月21日(火) 写真撮影のため遺構清掃

12月22日(水) 遺構清掃と南側からの全体遺構写真撮影

12月23日(木) 北側からの全体遺構写真撮影

12月24日(金) 遺構平面図作成

12月27日(月) 柱穴断ち割り図作成、柱穴掘削、調査区西・南壁断面図作成及び部分遺構写真撮影

12月28日(火) 遺構平面図作成

令和4年

1月4日(火) 調査区南壁土層断面図作成

1月6・7日(木・金) 調査区西・南壁付近下層確認調査を実施

1月12日(水) 資材撤収



現地説明会風景写真(上・下とも)

3 記録作業

調査区は、第2次調査の調査区割を踏襲し、東西方向をアルファベット（A～）で、南北方向は、数字（9～）を付して、地区を設定した。

遺構略図は、遺構検出を実施し、各地区の1/40の略測図（遺構カード）を作成した。これをもとに1/100の遺構略図を作成した。この略図によって遺構の位置関係を把握した。遺構平面図・調査区土層断面図は、1/20の手書きで実測を行った。

遺構の調査写真については、調査区全景や重要な個別遺構及び調査前状況などをニコンD3300・D800E・オリンパスのコンパクトデジタルカメラで撮影した。

4 文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法第94条に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項（周知の埋蔵文化財における土木工事等の発掘に関する通知）

・令和3年10月8日付 松建第915号

（三重県知事から三重県教育委員会教育長宛）

文化財保護法第99条第1項（発掘調査の着手報告）

・令和3年10月21日付 教理第192号

（三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長宛）

文化財保護法第100条第2項（文化財の発見・認定通知）

・令和4年2月7日付、教委第12-4417号

（三重県教委教育長から松阪警察署長宛）

（萩原）

II 位置と環境

1 地理的環境

大蓮寺遺跡（1）は、松阪市櫛田町に所在する。行政区分では、北から東側にかけて伊勢湾に面しており、南側に明和町、多気町、大台町、西側に奈良県、北側に津市に隣接する広大な市である。市の総面積が約623km²、人口約16万である⁽¹⁾。

また、市域内には、多くの河川が北流ないし東流している。とりわけ櫛田川は流域面積が広く、広大な沖積平野を形成している。大蓮寺遺跡もこの広大な沖積平野の一角に位置している。比較的に櫛田川の流れが安定している間に形成された集落跡と考えられる。

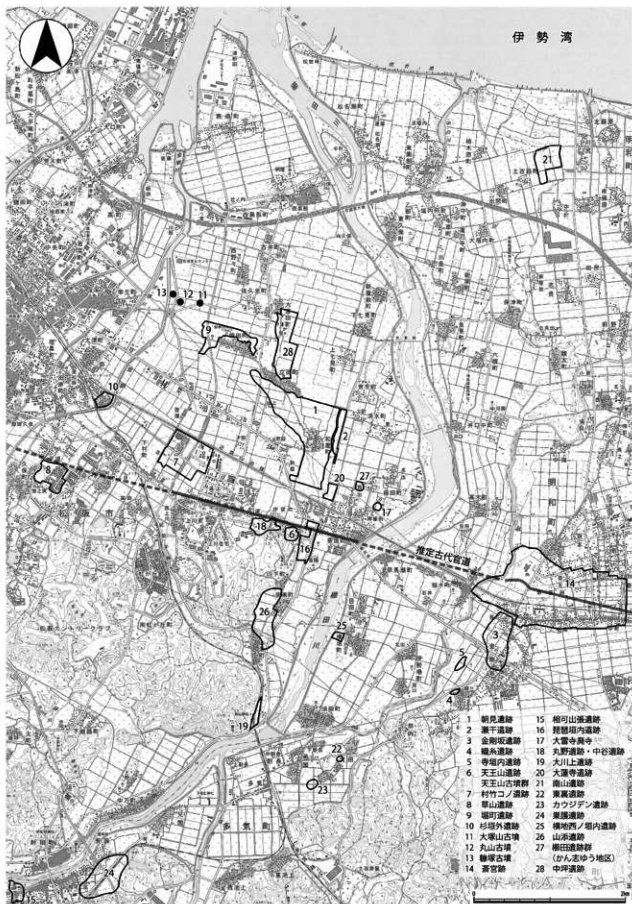
2 歴史的環境

大蓮寺遺跡⁽²⁾周辺には、数多くの遺跡が存在する。第2次調査の発掘調査報告書において歴史的環境で発掘調査を実施した多くの遺跡について述べているため、本書では、割愛する。第2次調査の報告書を参照されたい。（萩原）

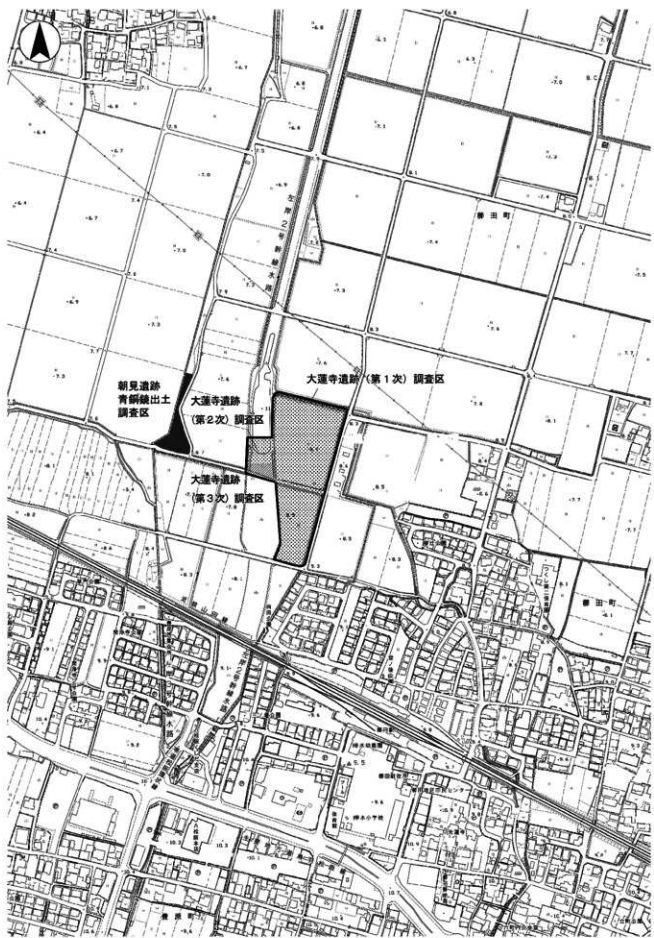
〔註〕

(1) 市町村要覧編集委員会『全国市町村要覧 令和5年版』(2023年)

(2) 三重県埋蔵文化財センター『大蓮寺遺跡（第2次）発掘調査報告』(2015年)

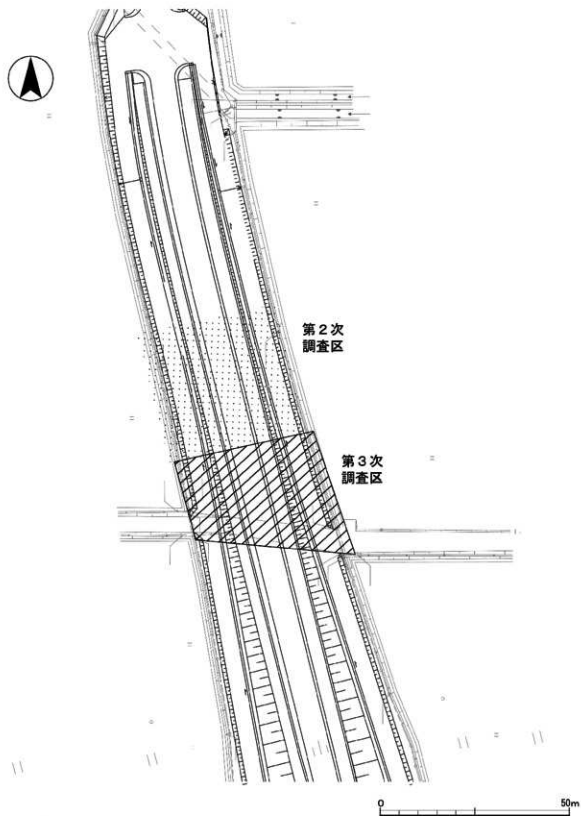


第1図 遺跡位置図 (1:50,000) [国土地理院「松阪」「松阪港」1:50,000)より]



第2図 調査区地形図 (1:5,000)

0 50 100 200m



第3図 調査区位置図 (1:1,000)

III 調査成果

1 基本層序

調査区における基本層序は、北から南側にかけての第1層が近現代の盛土である。第2層が水田耕作土、第3層が灰白色シルトないしマンガン粒を含む灰白色シルト層、及びマンガン粒を含む浅黄色シルト層である。遺構は、第3層上で検出した。

また西から東側にかけては、下層確認調査の結果を踏まえると溝による堆積層があるものの、西側から東側にかけてオリブ褐色シルト層から褐色シルト層を基盤層にして西方向にかけて緩やかに傾斜し、調査区内は微高地であったとみられる。なお、下層確認調査では、遺構検出面から1m掘削したが、下層に遺構を確認することは出来なかった。

2 遺構

SB16 調査区北西部において検出した掘立柱建物である。掘立柱建物は、東西3間以上(5.4m以上)×南北2間(3.96m)である。建物の方位は、東西棟で、N13°Eである。建物の面積は、21.38㎡以上である。建物の時期は、土師器の細片が出土しているため、平安時代の10世紀代とみられる。

SA17 調査区北東部において検出した櫓である。櫓は、東西2間(6m)である。櫓の方位は、N90°Eである。櫓の時期は、主軸が正方位をとるため、掘立柱建物よりも古い可能性があり、奈良時代以降の可能性もある。

SA18 調査区西部において検出した櫓である。櫓は、南北4間(5.9m)である。櫓の方位は、N3°Eである。櫓の時期は、掘立柱建物よりも古い可能性があり、奈良時代以降の可能性もある。

SK1 D14区において検出した土坑である。浅い土坑で埋土内に土師器杯の細片だけでなく焼土も含まれている。土師器杯の時期から平安時代の10世紀前半の可能性が考えられる。

SD2 調査区南辺を東西方向に掘削された溝である。溝の方位は、溝芯々間でN22.5°Eである。溝からの出土遺物には、山茶碗が含まれており、鎌倉時代まで溝として機能していたと考えられる。また、飯野部条里はN15°Eであり、この溝は条里溝

というよりも区画溝とみられる。

SD14 調査区南辺を東西方向に掘削された溝である。溝の方位は、溝芯々間でN22.5°Eである。調査当初は、区画溝と考えていたものの遺物に近世陶磁器が含まれていることから、SD14は、江戸時代までその機能を維持していたと考えられる。

SD3~11 調査区北側から中央部にかけて検出した素掘り溝である。全て、水田耕作時にトラクターによって掘削されたものである。遺物には、土師器細片が出土しているが、溝自体は、後世のものである。

SK12 G11区において検出した土坑である。土坑は浅く、盥盆状である。遺物は、土師器細片が出土しているため、平安時代とみられる。

SK13・15 F15・16区において検出した土坑で、浅い。遺物は、江戸時代の遺物を含んでいる。

3 遺物

遺物は、今回の発掘調査でコンテナバット10箱である。遺物の内容は、瓦の破片が多い。その他に土師器・灰軸陶器・緑釉陶器・陶器碗(山茶碗)・近世陶磁器がある。

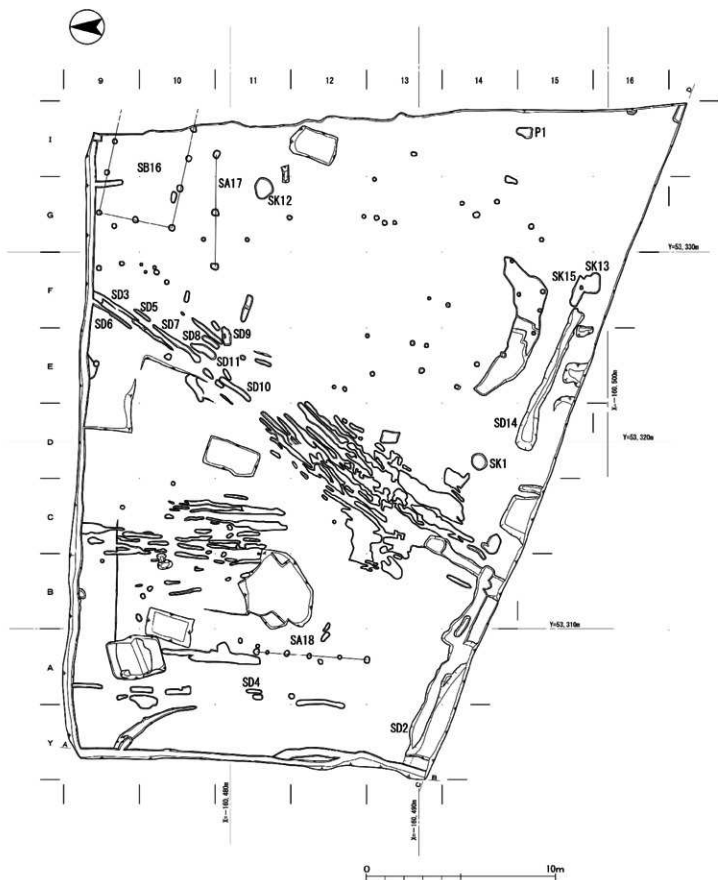
SB16出土遺物(1) 鉄製品の引手金具とみられる。

SK1出土遺物(2) 2は、土師器杯である。杯部外面に指頭圧痕跡が多く残る。時期は、10世紀前半とみられる。

SK13出土遺物(3・4) 3は、灰軸陶器碗である。折戸53号窯式併行とみられる。時期は、10世紀前半とみられる。4は、磁器碗であろうか、皿の可能性も考えられる。肥前のものである。時期は、18世紀代とみられる。

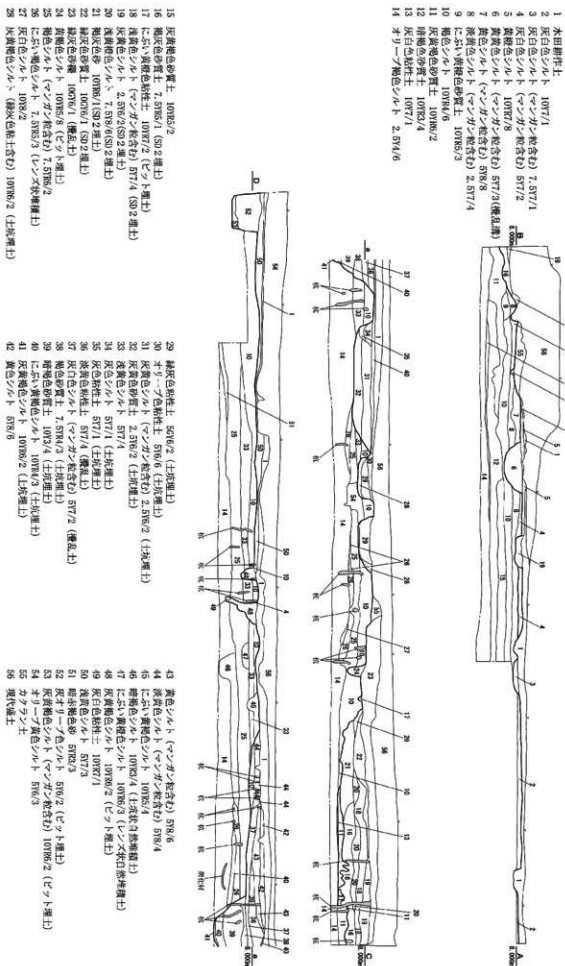
SD2出土遺物(5・6) 5は、土師器甕である。伊藤福年の仮A段階であろう。時期は、12世紀後半とみられる。6は、陶器碗(山茶碗)である。尾張型第5型式とみられる。時期は、12世紀末～13世紀初頭とみられる。

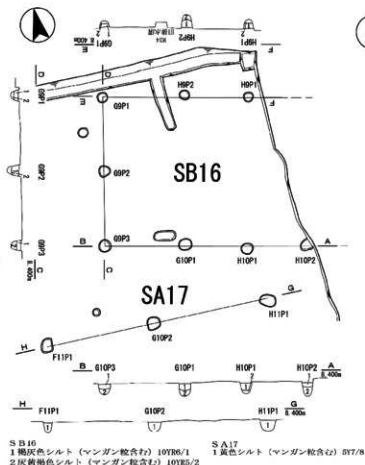
SD14出土遺物(7) 7は、陶器碗(山茶碗)である。尾張型第7型式とみられる。時期は、13世



第4圖 遺構平面圖 (1:200)

第5図 調査区断面図 (1:100)



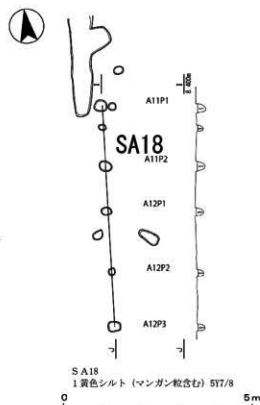


第6図 SB16・SA17実測図 (1:100)

紀中葉とみられる。

H15Pit1 出土遺物 (B) 8は、土師器杯である。杯部の体部外面に斜めに墨書がなされている。墨書は、3文字とみられ、最後の文字が「子」と判読できる。時期は、10世紀後半頃とみられる。

包含層ほか出土遺物 (9~20) 9は、石織である。三角形織で脚部の片方が欠損している。縄文時代から弥生時代にかけてのものとみられる。10は、弥生土器の高杯の脚部である。櫛書横線文が2段巡り、透孔が3方向に穿たれる。弥生時代後期のものである。11は、須恵器の杯身である。口縁部や天井部は欠損している。TK43~209型式併行とみられる。時期は、6世紀末~7世紀初頭とみられる。12は、須恵器製の口縁部である。口縁端部は、上下に引き出される。TK209型式併行とみられる。13は、緑釉陶器碗である。高台部は、欠損し、小片である。胎土は浅黄橙色であり、近江産のものであろう。時期は、不明である。14・15は、灰釉陶器碗である。折戸53号窯式併行とみられる。時期は、10世紀前半



第7図 SA18実測図 (1:100)

のものとみられる。16は、陶器碗 (山茶碗) である。尾張型第5型式とみられる。時期は、12世紀末~13世紀初頭とみられる。17は、志摩式製塩土器である。底部の一部が残存している。底部にモミガラ痕を残している。18は、土鍾である。一部欠損している。19は、土師器鍋である。伊藤編年の第4段階のものである。時期は、16世紀前半のものである。20は、灰釉の陶器皿である。江戸時代のものである。

(参考文献)

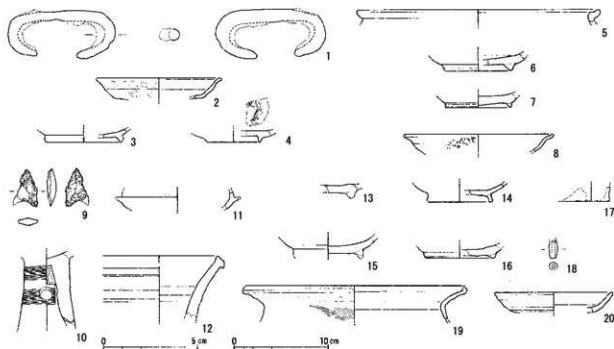
- 弥生土器：加納俊介・石黒立人編「弥生土器の様式と編年 東海編」(木耳社 2002年)
- 須恵器：田辺昭三「須恵器大成」(角川書店 1981年)
- 灰釉陶器・山茶碗・緑釉陶器：中世土器研究会編「概説 中世の土器・陶磁器」(真臨社 1995年)
- 南伊勢系土師器鍋：伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Wie history』Vol.1 (1990年)
- 陶器・磁器：愛知県史編さん委員会「愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系」(2007年)
- 九州近世陶磁学会「九州陶磁の編年」(2000年)

遺構番号	性格	小地区	検出規模 (m)			時期	出土遺物	備考
			長さ・長さ	幅・短径	深さ			
SK1	土坑	D14	0.8	0.8	0.06	平安時代	土師器杯	
SD2	溝	Y13~A14	7.3	1.0	0.52	中世以降	土師器・陶器・瓦	
SD3	溝	F9他	2.8	0.18	0.07	中世以降	土師器	
SD4	溝	A11	0.8	0.15	0.02	中世以降	土師器	
SD5	溝	F10	1.05	0.15	0.05	中世以降	土師器・灰軸陶器	
SD6	溝	F9	2.45	0.15	0.1	中世以降	土師器	
SD7	溝	E10	3.1	0.35	0.03	中世以降	土師器・瓦	
SD8	溝	E10	1.0	0.2	0.03	中世以降	土師器	
SD9	溝	E11	0.95	0.4	0.02	中世以降	土師器	
SD10	溝	E11他	1.95	0.2	0.02	中世以降	土師器	
SD11	溝	E10	1.5	0.4	0.02	中世以降	土師器	
SK12	土坑	G11	1.1	0.95	0.02	中世以降	土師器	
SK13	土坑	F15・I6	1.10	0.9	0.01	近世以降	土師器・灰軸陶器・磁器・瓦	
SD14	溝	D15~F15	7.9	1.0	0.26	近世以降	土師器・陶器・瓦	
SK15	土坑	F15	1.5	0.6	0.01	中世以降	土師器・灰軸陶器・瓦	
SB16	掘立柱建物	G9~H10	5.4以上	3.96	—	平安時代	土師器	
SA17	櫓	F10~H10	6.0	—	—	奈良時代以降	土師器	
SA18	櫓	A11~I2	5.9	—	—	奈良時代以降	なし	

第1表 遺構一覧表

遺構番号	グリッド	ピット番号	建物時期	規模	主軸	方位	備考
SB16	G9	Pit 1	10世紀代	3間以上 (5.4m以上) × 2間 (3.96m)	東西方向	N17° E	
		Pit 2					
	G10	Pit 3					
		H9					
	Pit 2						
	H10	Pit 1					
Pit 2							
SA17	F11	Pit 1	奈良時代以降	2間 (6m)	東西方向	N90° E	
	G10	Pit 2					
	H11	Pit 1					
SA18	A11	Pit 1	奈良時代以降	4間 (5.9m)	南北方向	N37° E	
		Pit 2					
	A12	Pit 1					
		Pit 2					
		Pit 3					

第2表 掘立柱建物・櫓一覧表



第8図 出土遺物実測図 (1:1/2・2~20:1/4)

報告番号	実測番号	種類	器種	地区	遺構層位	計測値 (cm)			技法・文様の特徴	胎土質地	焼成	色調	部位残存度	特記事項
						口径	底径	高さ						
1	903-01	鉄製品	引手金具	G-9	Pt-1	5.7	0.8	1.0	内: ナブ・オサユ後ヨコナダ 外: オサユ後ヨコナダ・オサユ・ナブ	密	良	黒	—	SB46 重さ13.8g
2	001-06	土師器	杯	D14	SK1	13.0	—	—	内: ハクメ 外: ハクメ・ナブ	密	良	黒	SBK7/6 底縁 2/12	—
3	001-04	反輪陶器	碗	F15	SK13	—	8.0	—	内: ハクメ 外: ヨコナダ・オサユ・ヨコナダ	密	良	黒	底縁 1/12 蓋縁 1/12 丸 輪: 明緑灰 5.5X9/1	内面研磨
4	001-05	磁器	碗or皿	F15	SK13	—	5.5	—	内: ヨコナダ・ナブ 外: ナブ・ヨコナダ	密	良	黒	底縁 1/12 丸 輪: 明緑灰 5.5X9/1	—
5	901-02	土師器	皿	A14	SD2	25.6	—	—	内: ヨコナダ・ナブ 外: ナブ・ヨコナダ	密	良	黒	底縁 3/12 丸 輪: 明緑灰 5.5X9/1	内面自然釉付着
6	901-01	陶器	山茶碗	Y13	SD2	—	6.8	—	内: ロタロナダ 外: 高台部貼り付け後ナブ・ロタロナダ	密	良	黒	底縁 3/12 丸 輪: 明緑灰 5.5X9/1	内面研磨
7	901-03	陶器	山茶碗	D15	SD14	—	6.8	—	内: ロタロナダ 外: 高台部貼り付け後ナブ・ロタロナダ	密	良	黒	底縁 3/12 丸 輪: 明緑灰 5.5X9/1	内面研磨
8	901-07	土師器	杯	H15	Pt-1	15.7	—	—	内: ナブ・ヨコナダ 外: ヨコナダ・オサユ・ナブ	密	良	黒	底縁 1/12 丸 輪: 明緑灰 5.5X9/1	墨書
9	002-03	石製品	石鏃	D11	包含層	2.0	1.1	0.4	—	—	—	—	—	開部欠損 オサユ 重さ6.73g
10	002-01	弥生土器	高杯	—	包含層	—	—	—	内: ミガキ・シロヨ・ナブ 外: 細結縹土・ミガキ	密	良	黒	底縁 3/12 丸 輪: 明緑灰 5.5X9/1	内面自然釉付着
11	901-08	須恵器	杯身	A12	カクラン	—	—	—	内: ロタロナダ 外: ロタロナダ・ロタロナダ	密	良	黒	底縁 3/12 丸 輪: 明緑灰 5.5X9/1	小片
12	002-02	須恵器	皿	B10	包含層	—	—	—	内: ロタロナダ 外: ロタロナダ	密	良	黒	底縁 3/12 丸 輪: 明緑灰 5.5X9/1	口縁部摩耗
13	902-08	緑輪陶器	碗	—	重積層	—	—	—	内: 濃靑不附 外: 濃靑不附	密	良	黒	底縁 3/12 丸 輪: 明緑灰 5.5X9/1	小片
14	902-09	反輪陶器	碗	—	南壁	—	6.4	—	内: ロタロナダ 外: 高台部貼り付け後ナブ・ロタロナダ	密	良	黒	底縁 1/12 丸 輪: 明緑灰 5.5X9/1	—
15	902-05	反輪陶器	碗	A14	南壁	—	7.4	—	内: ロタロナダ 外: 高台部貼り付け後ナブ・ロタロナダ	密	良	黒	底縁 2/12 丸 輪: 明緑灰 5.5X9/1	内面研磨
16	002-06	陶器	山茶碗	H12	鉄板底	—	7.1	—	内: ロタロナダ 外: 高台部貼り付け後ナブ・ロタロナダ	密	良	黒	底縁 2/12 丸 輪: 明緑灰 5.5X9/1	—
17	901-09	土師器	志摩式製土器	F15	包含層	—	—	—	内: 不附 外: ナブ	中今能	良	黒	底縁 3/12 丸 輪: 明緑灰 5.5X9/1	小片
18	902-10	土製品	土練	—	排水溝	—	0.9	—	—	—	—	—	—	重さ0.09g 丸径0.3cm
19	902-07	土師器	皿	—	重積層	23.3	—	—	内: ナブ・ヨコナダ 外: ハク・ヨコナダ	密	良	黒	底縁 1/12 丸 輪: 明緑灰 5.5X9/1	外面研付着
20	902-04	陶器	皿	A14	南壁	17.6	—	—	内: ロタロナダ 外: ロタロナダ	密	良	黒	底縁 1/12 丸 輪: 明緑灰 5.5X9/1	灰輪

第3表 遺物観察表

IV 自然科学分析

1 出土炭化材の放射性炭素年代測定

(1) はじめに

三重県大蓮寺遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法 (AMS法) による放射性炭素年代測定を行った。

(2) 試料と方法

試料は、土坑 S K 1 から出土した炭化材 2 点 (試料 No. 1: PLD-46781)、南壁の下層から採取された炭化材 1 点 (試料 No. 2: PLD-46782) の、計 2 点である。なお、試料 No. 1 は平安時代、試料 No. 2 は弥生時代以前と推定されている。

測定試料の情報、調整データは表 1 のとおりである。試料は調整後、加速器質量分析計 (パレオ・ラボ、コンパクト AMS: NEC 製 1.5SDH) を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

(3) 結果

第 5 表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}C$)、同位体分別効果の補正を行って暦年代に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、第 9 図に暦年代較正結果をそれぞれ示す。暦年代に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年代較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年代較正を行うために記載した。

¹⁴C年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代 (yrBP) の算出には、¹⁴Cの半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が 68.27% であることを示す。

なお、暦年代較正の詳細は以下のとおりである。

暦年代較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い (¹⁴Cの半減期 5730 \pm 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを

算出することである。

¹⁴C年代の暦年代較正には OxCal 4.4 (較正曲線データ: IntCal20) を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する 68.27% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ 暦年代範囲は 95.45% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年代較正曲線を示す。

(4) 考察

試料の測定結果を、2 σ 暦年代範囲 (確率 95.45%) に着目して整理する。

土坑 S K 1 から出土した試料 No. 1 (PLD-46781) は、775-787 cal AD (8.61%)、828-860 cal AD (10.70%)、871-905 cal AD (25.94%)、912-976 cal AD (50.20%) で、8 世紀後半～10 世紀後半の暦年代を示した。これは、奈良時代後期～平安時代中期に相当する。試料 No. 1 は、平安時代と推定されており、測定結果は整合的である。

南壁の下層から採取された試料 No. 2 (PLD-46782) は、1499-1417 cal BC (95.45%) を示した。縄文時代の暦年代について小林 (2017) を参照すると、縄文時代後期中葉に相当する。試料 No. 2 は弥生時代以前と推定されており、測定結果は概ね整合的であった。

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・加藤和浩・廣田正史・佐藤正教
・山形秀樹・Zaur Lomtadize・三谷智広

[参考文献]

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.

小林謙一 (2017) 縄文時代の天年―土器型式編年と炭素 14 年代―. 263p, 同成社.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P. J., Austin, W. E. N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell,

P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughes, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Bürgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A.,

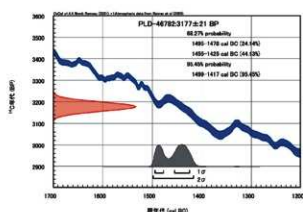
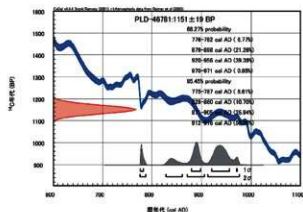
Friedrich, R., Köhler, F., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0–55 cal BP). Radiocarbon, 62(4), 725–757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)

測定番号	造路データ	試料データ	前処理
PLD-46781	試料No. 1 遺構：埴土坑SK1	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-46782	試料No. 2 遺構：南壁 層位：下層	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）

第4表 測定試料および処理

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正周年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-46781 試料No. 1	-27.51 ± 0.22	1151 ± 19	1150 ± 20	776-782 cal AD (6.77%), 879-898 cal AD (21.20%), 920-956 cal AD (39.39%), 970-971 cal AD (0.85%)	775-787 cal AD (8.61%), 828-860 cal AD (10.70%), 871-905 cal AD (25.94%), 912-976 cal AD (50.20%)
PLD-46782 試料No. 2	-27.61 ± 0.18	3177 ± 21	3175 ± 20	1495-1478 cal BC (24.14%), 1455-1425 cal BC (44.13%)	1499-1417 cal BC (95.45%)

第5表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果



第9図 暦年較正結果

2 出土炭化材の樹種同定

(1) はじめに

三重県松阪市大連寺遺跡から出土した炭化材の樹種同定を行った。なお、同一試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている(放射性炭素年代測定の項参照)。

(2) 試料と方法

試料は、土坑SK1と南壁下層から出土した炭化材、計2点である。SK1は平安時代の遺構、南壁下層は弥生時代以前の堆積層と考えられている。

樹種同定では、まず試料を乾燥させ、材の横断面(木口)、接線断面(板目)、放射断面(柾目)について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡(日本電子株式会社製 JSM-IT200)にて検鏡および写真撮影を行なった。

(3) 結果

同定の結果、土坑SK1の試料No.1は同定不可、南壁下層の試料No.2は広葉樹のケヤキであった。同定結果を第6表に示す。

以下に、同定された材の特徴を記載し、写真1に走査型電子顕微鏡写真を示す。

(1) ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino
ニレ科 写真1 1a-1c(No.2)

年輪のはじめに大型の道管が1~2列並び、晩材部では急に径を減じた道管が多数複合し、接線~斜線方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有し、小道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1列が方形となる異性で、1~5列となる。放射組織の上下端には、結晶が認められる。

ケヤキは温帯から暖帯にかけての肥沃な谷間などに好んで生育する落葉高木の広葉樹である。材はやや重くて硬いが、切削などの加工はそれほど困難ではない。

(2) 同定不可 写真1 2a(No.1)

横断面で木部組織は確認できるが、試料は微細で劣化が著しく、道管の有無や年輪界の確認が行えなかった。また、接線断面と放射断面は切り出せなかった。

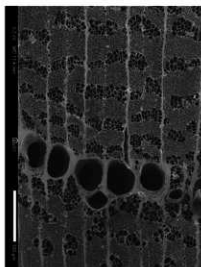
(4) 考察

土坑SK1の炭化材は同定不可であった。また南壁下層の炭化材はケヤキであった。弥生時代以前の遺跡周辺には、ケヤキが生育していたと考えられる。

小林克也(パレオ・ラボ)

試料No.	出土遺構・位置	層位	種類	樹種	時期	年代測定番号
1	土坑SK1	陶器	炭化材	同定不可	平安時代	PLD-06781
2	南壁	下層	炭化材	ケヤキ	弥生時代以前	PLD-06782

第6表 出土炭化材の樹種同定結果



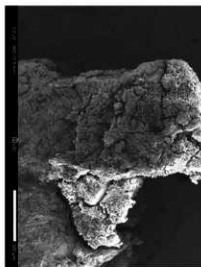
1 a



1 b



1 c



2 a

写真1 出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

1a-1c. ケヤキ(No. 2)、2a. 同定不可(No. 1) a:横断面、
b:接線断面、c:放射断面

V まとめ

1 遺構について

今回の発掘調査では、遺構が全体的に少ない。しかしながら、過去の周辺遺跡の発掘調査成果を踏まえて簡単に考察してまとめたい。

(1) 大蓮寺遺跡地形について

本遺跡の立地は、現況で平坦な沖積平野に位置している。本遺跡の西側の朝見遺跡の第5次調査3区の調査の結果¹⁾や本遺跡第1・2次調査²⁾や今回の下層調査の結果を踏まえて、地形を考えてみたい。

大蓮寺遺跡の東側は、1次調査は奈良時代の遺構が認められているだけでなく、北側の瀬干遺跡で弥生から古墳時代にかけての方形周溝墓が存在している³⁾。この時期は、ある程度、安定した地盤や地勢が形成されていたとみられる。

しかしながら、本遺跡の南西から北西側にかけては、旧河道的な自然流路が存在していたとみられる。朝見遺跡第5次調査の3区において流路が確認されているだけでなく、本遺跡の西側には字名に一ノ堰、二ノ堰、三ノ堰などが確認でき、字名が付けられる時期には流路が存在していたとみられる。

また、今回の下層調査の結果を踏まえると平安時代時代の旧地形は、本遺跡の西側に向けて下のような微高地とみられる。さらに、下層出土の炭化材の樹種同定からケヤキと判断される樹木があり、生育環境から付近には谷間などが存在していたことが推定される。従って、旧地形は榑田川によって開析谷や自然堤防が形成され、起伏の富んだ地勢であったと推測される。

つまり、榑田川の氾濫によって、平安時代以降には、現況のような地形となったとみられる。

(2) 掘立柱建物群について

調査区北東部において掘立柱建物を確認した。この建物は、第2次調査で確認した建物群の一角とみられる。第2次調査の掘立柱建物S B46・47・48・50は、それぞれ10世紀中葉から10世紀末葉に造営されている。建物の方位は、S B46・47がN18° E、S B48がN14° E、S B50がN11° Eである。さらにこの建物群を区画するようにS D20・21がそれぞ

れ東西・南北方向に掘割されている。

今回検出したS B16は、N17° Eである。最も建物方位に近いのは、S B46・47である。四面庇付建物であるS B47と2面庇付建物であるS B46に区画溝を挟んで付随していた可能性が最も高いとみられる。したがって、S B16の時期は10世紀後半から末葉であろうか。

また、S A17・18の方位は、N90° EないしN3° Eを示している。第2次調査の建物群やS B16と微妙に方位が異なる。S A17の出土遺物は、土師器細片で時期を断定できないが、建物群の中でもS B16・46・47に付随したものであろうか。S A18は、出土遺物がなく時期を決めるのが難しいが、第2次調査S D21の延長線上に位置するため、10世紀後半から末葉の同時期であろうか。または、北側に延伸していた可能性も考えられる。

(3) 溝SD2について

調査区南端で検出した溝である。この溝からは、出土遺物に山茶碗が含まれている。山茶碗は尾張型第5型式とみられ、鎌倉時代(12世紀末から13世紀初頭)と考えられる。そのため、その時期まで溝は機能していたと考えられる。溝の方位は、溝芯々間で測るとN22.5° Eであるため、上記した建物群の区画溝である可能性があろう。

(4) 土坑SK1について

土坑SK1は、SD2とSD14の間で確認した。出土遺物(報告番号2)の土師器杯は10世紀前半とみられるものである。土坑埋土には、焼土が含まれていた。また、自然科学分析の結果では10世紀第3四半期の分析がある。そのため、10世紀前半から後半にかけて何らかの火を用いるような行為を伴う祭祀が行われていたのであろうか。

2 遺物について

今回の調査によって出土した遺物は、非常に少ない。ここでは、墨書土器についてみてみる。

(1) 墨書土器

今回の調査では、1点出土した(報告番号8)。平成24年度の第2次調査では、墨痕跡のある土師器

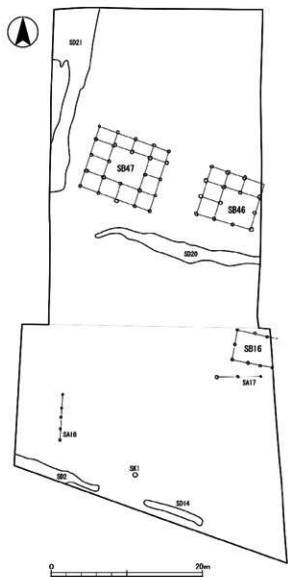
片が出土している。そのため、大蓮寺遺跡は、識字層が存在を窺わせる集落跡である。今回のものは、一部であるが判読できる。最初の2文字は判読できないが、最後の1文字は「子」である。器種は杯で、遺物の時期は平安時代の10世紀後半と考えられる。また、墨書される部位は、体部外面に横位で書かれている。所有者の氏名を書いた可能性を考えた場合、女性の名前が書かれたと考えられる。その一方で、判読できない2文字は、呪文のあるいは人面などの絵画的なものの可能性が考えられる。判読できないことで後者のほうに可能性があろう⁽⁴⁾。(萩原)

〔註〕

- (1) 三重県埋蔵文化財センター『朝見遺跡（第5次）発掘調査報告』（2022年）
- (2) 三重県埋蔵文化財センター『瀬干遺跡・綾垣内遺跡・大蓮寺遺跡・棚辻遺跡・北ノ垣内遺跡発掘調査報告』（1996年）
三重県埋蔵文化財センター『大蓮寺遺跡（第2次）発掘調査報告』（2015年）
- (3) 註2と同 三重県埋蔵文化財センター『瀬干遺跡（第2次）発掘調査報告』（2000年）
- (4) 判読については富宮歴史博物館榎村寛之氏ご教示による。



第10図 遺構変遷図 (1:500)



写 真 图 版



調査前風景（南東から）



調査区全景（南から）

写真図版 2



調査区全景（北から）



掘立柱建物SB16（南から）



槽SA18 (南から)



土坑SK1 (西から)

写真図版 4



下層確認調査坑西壁（南から）



下層確認調査坑南壁（西から）



2内



2外



3内



3外



4内



4外



5内



5外

写真図版 6



遺物写真 2



遺物写真 3

報告書抄録

ふりがな	だいらんじいせき(だいさんじ)はつかつちようさほうこく							
書名	大蓮寺遺跡(第3次)発掘調査報告							
副書名	～松阪市櫛田町所在～							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号	420							
編著者名	萩原義彦							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 ℡0596-52-1732							
発行年月日	西暦2024年3月1日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
だいらんじいせき 大蓮寺遺跡 (第3次)	あまげふさのつたかし 三重県松阪市 櫛田町	24204	a 823	34度 33分 07秒	136度 34分 51秒	2021/10/13 ～ 2022/1/31	838㎡	道路改築事業 (一)松阪環状線
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
大蓮寺遺跡 (第3次)	集落跡	平安時代 ～ 江戸時代	掘立柱建物・柵・ 区画溝・土坑	土師器・緑釉陶器・灰釉陶器				
要旨	今回は、平成24年度の第2次調査の南側において第3次調査を実施した。調査成果は、掘立柱建物・柵・区画溝・土坑を検出した。第2次調査の成果を踏まえると平安時代の遺構の変遷の様相が明らかになり、集落の有様が判明した。遺物には、大雷寺廃寺のものとみられる奈良時代後期の瓦をはじめとして土師器・緑釉陶器・灰釉陶器などが出土した。							

三重県埋蔵文化財調査報告420

大蓮寺遺跡(第3次)発掘調査報告 ～松阪市櫛田町所在～

2024(令和6)年3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印刷 共立印刷株式会社

